

十文字学園女子大学短期大学部司書課程の歩み* ：女性図書館員のキャリア形成をふまえて

石川敬史** 東 聖子***

1. はじめに

1.1 専門課程と司書課程

2013年4月1日現在の文部科学省の統計によると、司書養成科目を開講している大学は216大学（国立大学10、公立大学4、私立大学144、公立短期大学3、私立短期大学55）存在する⁽¹⁾。このうち埼玉県をみると、本学を含め9大学（私立大学7、私立短期大学2）⁽²⁾が開講している。こうした司書養成科目を開講している大学は、①筑波大学、慶応義塾大学、鶴見大学、駿河台大学など、図書館情報学専門教育に関する学部や学科、コースを設置している「専門課程」、②本学のように大学の正規カリキュラム外に設置されている「司書課程」に区分することができ、あわせて年間約1万人以上の司書有資格者を社会に送り出している。

司書課程とは、「図書館の専門的業務に従事する司書の養成と資格を付与するために、大学および短期大学で編成された課程の通称」⁽³⁾である。2008年6月に図書館法が改正され、司書となる資格を有するものとして、「大学を卒業した者で大学において文部科学省令で定める図書館に関する科目を履修したもの」（第5条第1項第1号）が定められた。しかし、この図書館法改正以前は、「大学において図書館に関する科目を履修したもの」（旧法第5条第1項第2号）と定められていたものの、「図書館に関する科目」が示されないため、司書講習科目として省令で定められた科目（14科目20単位）に相当するものとして運用されていた。

2006年以降、文部科学省の「これからの図書館の在り方検討協力者会議」が検討した結果、『司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について（報告）』（2009年2月）により、「図書館に関する科目」の基本的な考え方や科目体系が明確にされた。そして、2009年4月に「図書館法施行規則の一部を改正する省令」が公布され、図書館法「第五条第一項第一号に規定する図書館に関する科目」（13科目24単位）が示された。

* A Brief History of the Librarian Training Course at Jumonji College

** Takashi Ishikawa 十文字学園女子大学 21世紀教育創生部（Division for Arts and Sciences）

*** Shoko Azuma 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科（Department of Culture and Communication）

キーワード：司書課程 司書養成 図書館情報学教育 キャリア形成 女性図書館員

1.2 司書課程の歴史

本学短期大学部（2001年度までの十文字学園女子短期大学も含む表現とする）の司書課程は1973年度より開設され、現在まで40年以上にわたり2,600名以上の司書有資格者を育成した歴史を有している。1973年当時、埼玉県内で司書課程を開設していた大学・短期大学は、跡見学園女子大学（1968年開設）、独協大学（1969年開設）の2大学であることから、本学は埼玉県内で3番目に司書課程を開設したことがわかる⁽⁴⁾。

各大学における司書課程の歴史については、例えば1975年に司書課程を開設した女子聖学院短期大学（現・聖学院大学）司書課程が、司書課程開設15周年⁽⁵⁾、20周年⁽⁶⁾、30周年⁽⁷⁾にわたり記念誌を刊行している。ここには、科目担当教員一覧をはじめ、専任・非常勤講師による記事、多くの卒業生の文章が寄せられ、当時の歴史を振り返りながら司書課程の雰囲気や授業内容、教員の個性などが「小文字」で語られている。また、同志社大学図書館司書課程は、定期的に刊行している『同志社大学図書館学年報』の第38号（2013年）において、全237ページにもわたる「同志社大学図書館司書課程60周年記念特集号」を刊行している⁽⁸⁾。ここには、1951年度からの司書課程カリキュラム、科目名、担当者名をはじめ、「同志社図書館人物誌」と題して同志社が生んだ図書館人、司書課程を築いた専任教員について、一次資料を用いながら詳細に記述されている。さらに学部別の履修者、修了生の随想、図書館実習館の一覧など、同大学の司書課程の歴史が詳細に整理されている。この他にも、鶴見大学における司書・司書補講習60周年の記念誌⁽⁹⁾、さらには椋山女学園大学短期大学部の司書課程⁽¹⁰⁾などにおいても、過去の科目や担当者一覧などが詳細にまとめられている。

本学では、2015年度に短期大学部表現文化学科が改組され、大学の人間生活学部にて文芸文化学科が新設される。したがって、2014年度の短期大学部入学生が卒業した時点で、本学短期大学部司書課程は閉鎖することとなる（2015年度を予定）。しかし、これまでに本学短期大学部司書課程が積み重ねた約40年間の歴史は、他大学のように十分に整理されていない⁽¹¹⁾。

そこで本稿では、本学短期大学部司書課程に尽力された多くの教員・職員の方々と司書資格を取得した卒業生の想いを踏まえ、女子聖学院短期大学司書課程や同志社大学図書館司書課程等による整理方法を参考にしながら、本学短期大学部司書課程の小史をデザインした。加えて、本学短期大学部司書課程で司書資格を取得し、現在図書館で勤務している卒業生数人に対して、当時の司書課程における学びなどについて伺った。こうした歴史の整理や調査を通して、本学短期大学部司書課程の積み重ねと関係者の想いを明らかにし、今後の本学司書課程の運営や教育プログラムの開発に活かしていきたい。

2. 短期大学部司書資格取得者数

本学司書課程は1973年度に設置されたため、短大生が卒業する1974年度に本学の司書有資格者第1期生が社会に送り出されたことになる。表1が本学短期大学部における1974年度から2013年度までの司書資格取得者数である⁽¹²⁾。なお表1の2014、2015年度については、現在、学生が在学中のため、履修者数を記載した⁽¹³⁾。

表1をみると、本学短期大学部司書課程は、約2,600名もの司書資格取得者を育成したことが

表1 短期大学部司書資格取得者数（人）

期	卒業 年度	文学科 国語国 文専攻	文学科 英語英 文専攻	表現文 化学科	家政 学科	家政学 科家政 専攻	家政学 科生活 学専攻	初等教 育学科	幼児教 育学科	教養 学科	科目等 履修生	その他	合計
1	1974	11	0		6			8	1		0	0	26
2	1975	6	5			4		3	0		0	0	18
3	1976	11	4			3		1	1		0	0	20
4	1977	35	5			5		0	0		0	0	45
5	1978	41	4			6		0	0		0	0	51
6	1979	40	7			4		0	0		0	0	51
7	1980	36	13			12		0	0		1	0	62
8	1981	56	5			18		0	0		0	1	80
9	1982	27	8			15		0	0		0	0	50
10	1983	61	14			11		0	0		0	0	86
11	1984	48	10			16		0	0		0	0	74
12	1985	41	5			9		0	0		0	0	55
13	1986	58	20			16		0	0		0	0	94
14	1987	82	9			8		0	0		0	0	99
15	1988	85	14			24		0	0		0	0	123
16	1989	34	11			9		0	0		0	0	54
17	1990	53	6			3				0	0	0	62
18	1991	48	7			7				0	0	0	62
19	1992	73	11			11				0	0	0	95
20	1993	82	5				12			0	0	0	99
21	1994	119	22				9				0	0	150
22	1995	93	21				10				1	0	125
23	1996	95	16				25				0	0	136
24	1997	99	19				14				2	0	134
25	1998	76	16				12				1	0	105
26	1999	69	10				19				1	0	99
27	2000	69	7				9				0	0	85
28	2001	54	2								1	0	57
29	2002	139	1								2	0	142
30	2003	14	7								0	0	21
31	2004	24	2								0	0	26
32	2005	35	0								0	0	35
33	2006	28	0								0	0	28
34	2007	21	0								0	0	21
35	2008	33	0								0	0	33
36	2009	45	1								0	0	46
37	2010	35	2								0	0	37
38	2011	16	0								0	0	16
39	2012	14	0								1	0	15
40	2013			22							0	0	22
41	2014			18							0	0	18
42	2015			20							0	0	20
合計		2,006	289	60	6	181	110	12	2		10	1	2,677

・ 本学の学生支援部教務課に保存されている『図書館司書単位取得証明書：昭和五十年三月記』（十文字学園女子短期大学）からデータを抽出し、年度別に整理した。
 ・ 2014、2015年度については、本稿執筆現在、学生が在学中のため、履修者数を記載した。

わかる。このうち、司書資格を取得できる学科は、短期大学部全ての学科ではなかったが、文学科国語国文専攻の占める割合が約74.9%と最も高く、次いで文学科英語英文専攻が約10.8%となっていた。特に、文学科の国語国文専攻と英語英文専攻では、1973年度の学科開設当時から表現文化学科へ改組（2012年度）するまで司書資格を取得することができた。他方、家政学科では、家政専攻（1974年度に家政専攻と食物栄養専攻に分離）と生活学専攻（1992年度に家政専攻から改称）で取得することができたが、2000年度に生活学専攻が募集停止となっている。さらに、初等教育学科⁽¹⁴⁾と幼児教育学科においては、1988年度入学生まで司書資格を取得することができたが⁽¹⁵⁾、取得者は極めて少なく、1981年度に専攻科幼児教育専攻の学生1名が最後に取得している。教養学科は各年度の『学生便覧』によると、1989 - 1992年度入学生まで司書資格の取得はできたが、取得者はいなかった。

毎年度の司書取得者数をみると、年間平均63.8名が取得していた。最も多い年度は、1994年度の150名（このうち文学科国語国文専攻79.3%）であり、次いで、2002年度142名（同97.9%）、1996年度136名（同69.9%）、1997年度134名（同73.9%）、1995年度125名（同74.4%）となっており、とりわけ1990年代の取得者数が多いことがわかる。

なお、大学（四年制）における司書資格取得については、大学開設の1996年度から社会情報学部で取得できた。2011年度からは社会情報学部改組後の人間生活学部生活情報学科、メディアコミュニケーション学科で、さらに2012年度以降は人間生活学部の全学科で取得できるようになった。

3. 司書課程カリキュラム

3.1 省令科目の動向

図書館法施行規則における省令科目や司書課程については柴田正美⁽¹⁶⁾が歴史を整理し、阪田蓉子⁽¹⁷⁾、川原亜希世⁽¹⁸⁾、平井歩実⁽¹⁹⁾、平野英俊⁽²⁰⁾、二村健⁽²¹⁾、田窪直規⁽²²⁾などが各大学の司書課程カリキュラムや司書養成の課題を指摘している。戦後、省令科目は各時代に改正が重ねられ、①1950年9月から1968年3月、②1968年4月から1997年3月、③1997年4月から2012年3月、④2012年4月以降の4つの時期に区分できる⁽²³⁾。このうち柴田正美は、1968年3月に受講資格を短期大学卒業程度に広げたことは、司書の社会的役割や評価を変えたことと指摘している。加えて柴田は、同年には講習修了証書の授与者を文部大臣から講習大学長に変更したことにより、司書資格取得者数を把握できなくなった点も指摘している。

3.2 短期大学部司書課程科目

ここでは1973年度から開講された本学短期大学部司書課程の開講科目を整理し⁽²⁴⁾、その特徴をみていきたい。なお、各年度の科目と担当者の詳細は、本稿末尾に一覧表（表5 短期大学部司書課程科目担当教員一覧）としてまとめている。

（1）1973—1976年度

1973年度時点における省令科目は表2の左側の通りである。甲群（必修科目）が9科目15単位、乙群・丙群（選択科目）から各2科目4単位、合計19単位以上の履修が求められていた。

表2 1973—1976年度の司書課程科目

省令科目			本学開講科目					
区分	科目名	単位数	科目名	1973	1974	1975	1976	
甲群	図書館概論	2	図書館通論	○	○	○	○	
	図書館資料論	2	図書館資料論	○	○	○	○	
	参考業務	2	参考業務	○	○	○	○	
	図書館活動	2	図書館活動	○	○	○	○	
	資料目録法	2	資料目録法	○	○			
	資料分類法	2	資料分類法	○	○			
				資料組織論			○	○
				参考業務演習	○	○	○	○
				資料目録法演習	○	○		
				資料分類法演習	○	○		
乙群			資料組織演習			○	○	
			図書館実習		○	○	○	
			図書及び図書館史	○	○			
			資料整理法特論	○	○	○	○	
			情報管理	○	○			
丙群			青少年の読書と資料	○	○	○	○	
			図書館の施設と設備		○			
			人文科学及び社会科学の書誌解題	○	○	○	○	
			社会教育	○	○	○	○	
			視聴覚教育	○	○	○	○	

これに対して、本学では1973年度から1976年度にかけて表2の右側に記載の科目（各年度○印の科目）を開講していた。

開講科目を詳しくみると、①「図書館実習」（2単位）が1974年度から1976年度にかけて必修科目として開講、②1975年度より「資料目録法」と「資料分類法」の内容を含む「資料組織論」（4単位）、「資料目録法演習」と「資料分類法演習」の内容を含む「資料組織演習」（2単位）が通年科目として開講、③「図書及び図書館史」（2単位）、「情報管理」（2単位）が1973、1974年度のみ開講、⑤「図書館の施設と設備」（2単位）が1974年度のみ開講となっていることに特徴がある。特に、省令科目に記載がない「図書館実習」が1974年度から1976年度の3年間にわたり必修科目として位置づけられていたこと（1977年度以降開講なし）は興味深い。この「図書館実習」は、司書課程開設当初の1973年度『学生便覧』の司書課程科目表に「図書館実習」の記載は無いが、注記として「司書課程は図書館実習（2週間）を行う。2年次。」⁽²⁵⁾とあることから、「図書館実習」は本学司書課程設置当初から計画されていたことがわかる。このように、司書課程の開設から数年間は、科目の新規開講や再編などが繰り返されていた。

（2）1977—1998年度

その後、1997年度の省令科目の改定まで司書課程開講科目の大幅な変更はないが（本学では1999年度から新科目へ）、この間の開講科目を詳しくみると、下記のように選択科目の一部変更をみることができる。

- ・「人文科学及び社会科学の書誌解題」：1986年度以降開講なし

- ・「コミュニケーション論」：1985－1989年度まで開講
- ・「マスコミュニケーション」：1990－1998年度まで開講。但し、「コミュニケーション論」の読み替え科目として開講⁽²⁶⁾
- ・「社会教育」：1989年度以降開講なし
- ・「視聴覚教育」：1990－1998年度まで「情報処理」として読み替え⁽²⁷⁾

(3) 1999－2011年度

1996年8月に文部省令第27号をもって、図書館法施行規則の一部を改正する省令が制定・公布された。改正された省令科目は1997年4月1日から施行・適用されるが、新規則の相当科目へ移行ができない大学は1998年4月1日までに移行することとされ、それでも移行できない大学は、2000年3月31日まで旧規則による相当科目を開設することができた⁽²⁸⁾。本学の『学生便覧』の各年度によると、本学短期大学部司書課程は1999年度入学生から新課程に移行したことがわかる。

1999年度以降の開講科目は表3の通りであり、「生涯学習概論」、「図書館経営論」の新設や「児童サービス論」の必修化など、これまでの科目から大きく変化していることがわかる。さらに、1999年度の新科目開講当時、本学短期大学部司書課程では、表3に記載した選択科目も含めた17科目28単位全ての本学開講科目が必修科目となっていた⁽²⁹⁾。しかし、2002年度からは「必修科目（12科目22単位）及び選択必修科目（5科目6単位）より2科目以上を修得すること」⁽³⁰⁾となった。なお、2003年度に「情報機器論」が、2008年度に「図書及び図書館史」は開講されていなかった。

表3 1999－2011年度の司書課程科目

区分	本学開講科目	単位数
必修 (甲群)	生涯学習概論	2
	図書館概論	2
	図書館経営論	2
	図書館サービス論	2
	情報サービス概説	2
	レファレンスサービス演習	1
	情報検索演習	1
	図書館資料論	2
	専門資料論	2
	資料組織論	2
	資料組織演習	2
選択 (乙群)	児童サービス論	2
	図書及び図書館史	1
	資料特論	1
	コミュニケーション論	2
	情報機器論	1
	図書館特論	1

* 選択科目は1999-2001年度まで全て必修科目

表4 2012年度以降の司書課程科目

区分	省令科目		本学開講科目	
	科目名	単位数	科目名	単位数
必修 (甲群)	生涯学習概論	2	生涯学習概論	2
	図書館概論	2	図書館概論	2
	図書館制度・経営論	2	図書館制度・経営論	2
	図書館情報技術論	2	図書館情報技術論	2
	図書館サービス概論	2	図書館サービス概論	2
	情報サービス論	2	情報サービス論	2
	児童サービス論	2	児童サービス論	2
	情報サービス演習	2	情報サービス演習Ⅰ	1
			情報サービス演習Ⅱ	1
	図書館情報資源概論	2	図書館情報資源概論	2
情報資源組織論	2	情報資源組織論	2	
情報資源組織演習	2	情報資源組織演習	2	
選択 (乙群)	図書館基礎特論	1	図書館基礎特論	1
	図書館サービス特論	1	図書館サービス特論	1
	図書館情報資源特論	1	図書館情報資源特論	1
	図書・図書館史	1	図書・図書館史	1
	図書館施設論	1	科目設置なし	
	図書館総合演習	1		
	図書館実習	1		

(4) 2012—2015年度

2009年4月30日に「図書館法施行規則の一部を改正する省令」が公布され、甲群の必修科目(12科目22単位)、乙群の選択科目(2科目2単位以上)のうち、「図書館情報技術論」の新設、選択科目では「図書館実習」などの新設科目が設置された。2012年4月1日から本学短期大学部司書課程では表4に記載した科目が開講され、旧科目からの読み替えを重視して選択科目を開講した。

このように本学短期大学部司書課程全体の開講科目をみると、省令科目の改正に伴う開講科目の変更を着実にいき、さらに選択科目を中心に軽微な変更を積み重ねてきたことがわかる。とりわけ、開設当初の「図書館実習」の必修科目化、1975年度からの資料組織関連科目の通年化、1990年代から司書課程選択科目と学科科目の重複化(「情報処理」等)などの特徴をみることができる。こうした持続的な司書課程の運営は、担当教員や職員の力によるところが大きいといえよう。そこで、次章では、非常勤講師を含め、本学短期大学部司書課程を担当した教員を紹介する。

4. 短期大学部司書課程担当教員

前章で紹介した司書課程開講科目の担当教員については、『学生便覧』の各年度から抽出し、本稿末尾に科目名とともに一覧表(表5 短期大学部司書課程科目担当教員一覧)としてまとめた。本章では、本学にて四年制大学開設以前までの1973年度から1995年度前後までを中心に、

本学短期大学部司書課程の科目を担当した教員の略歴や活動について、紙数の都合から一部の教員に絞り簡単に紹介する。

4.1 1973—1976年度

(1) 松本収正（林収正）先生

松本収正（林収正）先生は、本学司書課程開設の1973年度から複数の科目を担当されていた。例えば「図書館実習」を1976年度まで、司書課程の基礎科目となる「図書館通論」を1979年度まで、さらには資料組織関係の科目を1984年度まで12年間にわたり担当された記録があることから、本学司書課程の開設に対する助言や非常勤講師の紹介など、本学では非常勤講師ではありながら開設から運営まで幅広くご尽力いただいた先生と推測できる。松本先生は、1958年に中央大学文学部文学科国文学専攻を卒業⁽³¹⁾、間宮図書館研究所代表⁽³²⁾、茨城女子短期大学助教教授⁽³³⁾を経て、1985年4月に女子聖学院短期大学助教教授として着任された。女子聖学院短期大学では1975年度の司書課程開設に携わり、開設当時から非常勤講師として10科目以上を担当されていた⁽³⁴⁾。なお、当時の女子聖学院短期大学司書課程では、司書課程の方針を明確にされ⁽³⁵⁾、当時の省令科目には無い「図書館実習」や「図書館学演習」、「古文書概説」などの科目を開講し、司書資格を取得するために約30単位を設定していた。

(2) 藤田忠雄先生

藤田忠雄先生は、1973年度の本学司書課程開設時から1974年度の2年間、「図書館資料論」を担当された。藤田先生は、1950年1月下旬から日本図書館協会の事務局職員として勤務し、長年、日本図書館協会の図書選定事業を担当された⁽³⁶⁾。こうした経験から、藤田先生は、社会科学・自然科学の学校図書館向けのシリーズ出版の紹介⁽³⁷⁾や日本十進分類法に関する文献目録をまとめている⁽³⁸⁾。

(3) 上野茂先生

上野茂先生は、1975—1976年度に「図書館活動」を担当された。さらに1973—1974年度に「図書館通論」の担当教員名において「上野」と記載があるが、これは上野茂先生と推察できる。1932年に埼玉師範学校本科を卒業後、大里郡、比企郡の小学校などを経て、1941年に松山中学（旧制）の教諭、松山高校教諭を務めた。1950年には公選第1回の埼玉県教育委員の選挙に立候補・当選し、以後、1957年10月まで教育委員を務めた⁽³⁹⁾。その後、1957年11月に44歳で埼玉県立浦和図書館長に就任⁽⁴⁰⁾。埼玉県立浦和図書館の新館をはじめ、埼玉県立熊谷、埼玉県立川越の各図書館の建設にも携わり（図書館長も歴任）、1976年3月に退職された。

(4) 津久井安夫先生

津久井安夫先生は、1973—1974年度に「資料分類法」を、1973年度に「資料分類法演習」を担当された。1929年に立教大学文学部を卒業後、立教大学図書館に20年間、明治学院大学図書館に1年、そして中央大学図書館に18年間（定年まで）勤務された⁽⁴¹⁾。立教大学図書館では副館長、明治学院大学図書館では主事、中央大学図書館では資料課長という役職の記録が残されている⁽⁴²⁾。

(5) 長谷川宏先生

長谷川宏先生は、1973—1976年度まで「資料整理法特論」を担当された。長谷川先生は、帝

国美術学校（現・武蔵野美術大学）を卒業、中国・北京の近代科学図書館などを経て、地元の中学校教員、埼玉県立行田女子高校の学校図書館⁽⁴³⁾に約7年間勤務された。特に行田女子高校の学校図書館では、1951年6月から学校図書館の『月報』を刊行し、生徒や教員の記事のほか長谷川先生が執筆したとみられる記事も多数掲載されていた。例えば、学校図書館の目標⁽⁴⁴⁾、読書調査、目録カードの仕組みや目録⁽⁴⁵⁾、図書の購入図書⁽⁴⁶⁾、生徒との座談会など、『月報』には充実した記事が収録され、記事索引まで存在した。同校は1954年に独立棟平屋建ての学校図書館を新築し⁽⁴⁷⁾、1957年度の『図書館概要』に平面図が記載されている⁽⁴⁸⁾。その後、1960年頃に埼玉県立浦和図書館に勤務し⁽⁴⁹⁾、1970年には埼玉県立熊谷図書館に異動、館内奉仕課長⁽⁵⁰⁾、館内奉仕部長を経て、1975年に副館長に就任、1977年3月に退職した⁽⁵¹⁾。埼玉県立図書館では主に郷土資料（古文書を含む）やレファレンスの担当であった。埼玉県立図書館退職後は、埼玉県総務部県史編さん室嘱託⁽⁵²⁾、埼玉県立文書館の古文書課⁽⁵³⁾、文書調査員（1995年）⁽⁵⁴⁾として勤務された。

（6）中藤喜八郎先生

中藤喜八郎先生は1973年度の開設当時、選択科目の「社会教育」を1977年度まで、さらに1985—1988年度にも担当された。中藤先生は、1950年代後半に大宮市内（現・さいたま市）の中学校教諭、教頭、校長を歴任後、1965年4月に埼玉県教育委員会事務局職員、1969年に社会教育課長、1973年4月に総務課長、1974年4月に埼玉県立浦和図書館長（1975年3月まで）を経た後、大宮市教育委員会委員長などを歴任された⁽⁵⁵⁾。

4.2 1977—1984年度

（1）草野正名先生

草野正名先生は、1981年度から「図書館通論」、「図書館資料論」、「参考業務」、「参考業務演習」、「資料整理法特論」を、さらに1982年度からは「図書館活動」、「青少年の読書と資料」を長期間にわたり（1990年度まで）、数多くの科目を担当された。草野先生は⁽⁵⁶⁾、1935年3月に国学院大学高等師範部（国漢科）を卒業、1938年3月国学院大学哲学科卒業、1938年4月より文部省教学局、海軍省（教科書編纂等）を経て1943年4月千葉外事専門学校教授（現・麗澤大学）。1950年11月より1965年3月まで埼玉県立図書館に勤務され、1965年4月から1980年3月まで図書館短期大学教授、その後、国士館大学教授に着任された。その間、1960年8月に明治の初期から中期にかけて書籍館の発展に関する「書籍館の研究」によって国学院大学から文学博士の学位を授与された⁽⁵⁷⁾。なお、1956年4月から1979年3月まで埼玉大学で非常勤講師も務めていた。

（2）末吉哲郎先生

末吉哲郎先生は、「参考業務」と「参考業務演習」を1978—1980年度まで担当された。末吉先生が本学の非常勤講師として担当された1978年度は、社団法人経済団体連合会図書館の部長に就任された年であった⁽⁵⁸⁾。末吉先生は、1957年度に社団法人経済団体連合会事務局に入局⁽⁵⁹⁾、同年に東洋大学司書講習を受講⁽⁶⁰⁾、経団連の図書部（図書館）を経て、1978年図書館部長、1986年関西事務所所長、1989年財団法人経済広報センター総務部長、1996年7月新国立劇場運営財団常務理事、2001年4月写真映像文化振興支援協議会専務理事、図書館サポートフォーラ

ム代表幹事などを歴任した⁽⁶¹⁾。専門図書館に関する執筆記事が多く、専門図書館関係の団体やレファレンスブックの編集⁽⁶²⁾などにも携わっていた⁽⁶³⁾。

(3) 藤井均先生

藤井均先生は、選択科目の「社会教育」(1978-1983年度)と、「視聴覚教育」(1978-1981年度)を担当された。1978年当時は大宮市(現・さいたま市)教育委員会指導課長、その後1982年4月に埼玉県教育局社会教育課長、1983年4月埼玉県教育局義務教育課長、1989年4月埼玉県立南教育センター所長などを経て、1993年7月埼玉県教育委員会委員(1997年12月より委員長)に就任している⁽⁶⁴⁾。

(4) 木原美恵子先生

木原美恵子先生は、1978-1980年度まで「資料整理法特論」、1979-1980年度まで「図書館資料論」を担当された。木原先生は、財団法人流通経済研究所の情報サービス部研究員(資料室)として勤務していた記録がある⁽⁶⁵⁾。財団法人流通経済研究所は、1963年4月の任意団体流通経済研究所に始まり、1966年10月に財団法人として発足した。資料室には、流通・マーケティング調査に必要な情報・文献を収集するほか、「流通情報インデックス」といった雑誌・新聞記事のデータベースを構築している⁽⁶⁶⁾。

4.3 1985-1995年度

(1) 中佐古勇先生

中佐古勇先生は、1991-2007年度まで「図書館通論」、「図書館概論」をはじめ、「専門資料論」や「図書館経営論」など、多くの本学司書課程科目を長期間担当された。1977年度にも「参考業務」、「図書館活動」を担当された。中佐古先生は、1963年に中央大学法学部を卒業後⁽⁶⁷⁾、菊井法律事務所、1965年に図書館短期大学特別養成課程を修了⁽⁶⁸⁾後、荒川林産化学工業研究所資料室を経て、1966年近畿大学中央図書館に勤務。1971年近畿大学通信教育部講師(担当図書館学)⁽⁶⁹⁾、1972年フェリス女学院大学事務長、田中千代学園短期大学助教授(担当社会学)⁽⁷⁰⁾、1980年広島女学院大学助教授、1983年東京家政学院短期大学英語科・秘書専攻助教授⁽⁷¹⁾、1987年日本橋女学館短期大学教授⁽⁷²⁾などを経て、1990年に十文字学園女子短期大学教授に着任された(2006年度まで)。

(2) 戸田一雄先生

戸田一雄先生は、1987年度から「資料組織論」(1998年度まで)、「資料組織演習」(1990年度まで、1998-2006年度まで)をはじめ、1991年度から「図書館活動(図書館サービス論)」(2003年度まで)、「参考業務」(1998年度まで)、「参考業務演習(レファレンスサービス演習)」(2003年度まで)、加えて1999年度からは「生涯学習概論」(2003年度まで)、「情報サービス概説」(2003年度まで)を担当されていた。このように戸田先生は、本学短期大学部司書課程の多くの科目を長期間担当されていたことがわかる。戸田先生は、1972年に大妻女子大学などを経て、1977年4月に新座市教育委員会、公民館長、図書館長(1986年度まで)⁽⁷³⁾の後、1987年4月国土館大学助教授に着任された⁽⁷⁴⁾。本学短期大学部司書課程では、国土館大学在職時(退職後も含む)に非常勤講師として科目を担当されていたことがわかる。

(3) 狩野敏也先生

狩野敏也先生は、1985年度から選択科目の「コミュニケーション論」を担当され、さらに1993-1999年度まで「資料組織演習」を担当された。狩野先生は、1952年に北海道大学法経学部を卒業後、NHKに入局。札幌中央放送局放送部や函館放送局放送部、1959年に本部教育局社会教育部ディレクター⁽⁷⁵⁾、報道局社会部などを経て⁽⁷⁶⁾、NHK放送局資料センター主査⁽⁷⁷⁾などを務めた後、1987年に十文字学園女子短期大学教授に着任された。1964年より詩誌『風』同人、郷土玩具の研究者でもあり、現代詩、料理の分野でも数々の受賞歴がある。

(4) 関根敬一郎先生

関根敬一郎先生は、1985-1986年度に「資料組織論」と「資料組織演習」を担当されていた。関根先生は、埼玉県立浦和図書館⁽⁷⁸⁾の整理部門⁽⁷⁹⁾を中心に埼玉資料に関する業務も担当され、1970年に整理係長、1974年に整理課長、1980年に館内奉仕部長、1987年に社会教育課主幹兼任、そして1988年に埼玉県立熊谷図書館副館長兼館外奉仕部長を経て⁽⁸⁰⁾、1991-1993年度まで埼玉県立文書館の館長⁽⁸¹⁾を務めた。加えて、1991年からは全国歴史資料保存利用機関連絡協議会の会長も務めていた⁽⁸²⁾。なお、関根先生は詩集も刊行されている⁽⁸³⁾。

(5) 志村尚夫先生

志村尚夫先生は、1991年度から「図書館資料論」と「資料組織演習」を中心に、「資料組織論」(1999年度から)、「図書及び図書館史」(2000年度から)の科目を2003年度まで担当された。志村先生は、早稲田大学法学部を卒業後、1962年3月に文部省図書館職員養成所(B課程)を修了、同年4月に東京大学附属図書館、1970年4月図書館短期大学講師、助教授、教授を経て(1981年4月からは図書館情報大学)、1996年4月から2001年3月まで十文字学園女子大学教授(司書課程も担当)に着任された⁽⁸⁴⁾。専門は目録学や分類法、索引法であり、この他に樹村房や青弓社における学校図書館関係の教科書の編集に携わっていた。

この他、司書課程開設当初(1973年度)から「人文科学及び社会科学の書誌解題」を担当された石沢澈先生(北海道教育大学旭川分校史学研究室⁽⁸⁵⁾)を経て、十文字学園女子短期大学教授)、1977-1978年度に「図書館資料論」を担当された吉澤輝夫先生(日本出版販売株式会社)⁽⁸⁶⁾のお名前がある。1995年度以降も、本学短期大学部司書課程において数多くの先生方にご尽力いただいた。これらの先生については、大学の司書課程をご担当された先生方も含め、機会を改めて調査していきたい。

なお、本学短期大学部の司書課程を担当された教員名をみると、1975年度に司書課程を開設した女子聖学院短期大学(現・聖学院大学)で担当された先生方(林收正先生、長谷川宏先生、木原美恵子先生、吉澤輝夫先生)と重なっていることがわかる⁽⁸⁷⁾。

5. 司書活躍中の卒業生(本学短期大学部文学科卒)へのアンケート実施結果：短期大学から大学への継承化のために

本学短期大学部司書課程は履修する単位数も多く、学修が厳しいにもかかわらず開設当初から大変人気のある資格であった。また、司書は就職においても女子短大生に人気の高い資格で

はあったが、公共図書館の正規職員として司書になるには公務員試験の難関突破という大きな壁があり、司書として就職するには難しかった。しかしながら、その難関を突破して、あるいは好機に恵まれた幸運な卒業生がいた。そこで今回、司書として図書館で働いている卒業生の中から、数人の卒業生を対象に簡単なアンケートを行った。例えば、当時の司書課程の様子、さらには司書として業務上必要なスキルの習得方法、近未来の図書館像などの質問項目を設定した。

今回のアンケート調査を通して、本章では、本学短期大学部司書課程の社会的役割を顧みるとともに、未来を見据えつつ本学の司書課程が今後果たす役割を検討したい。こうした分析を通して、本学司書課程の教育内容が、新時代にふさわしいかたちで改変されつつ継承するものと考えている。

5.1 対象者

対象とした本学短期大学部卒業生は下記の4名（現職・敬称略）である。

- A：風間麻里子 平成元年3月卒（尚美学園大学メディアセンター専任職員）
- B：能見弥生 平成2年3月卒（東松山市立図書館任期付 寄贈図書担当）
- C：S. K. 平成10年3月卒（学校図書館勤務 専任）
- D：島野香織 平成12年3月卒（武蔵野学院大学図書館 専任運営一般）

5.2 アンケートの質問と回答内容

アンケートの質問と回答内容は下記の通りである。なお、紙面の都合上、全ての回答を記載することはできず、一部回答は省略した。

（1）当時、司書課程の中核だった先生のお名前

- A：草野正名先生
- B：草野正名先生
- C：中佐古勇先生
- D：中佐古勇先生

（2）司書課程の授業で貴重だったと思う授業

- ・先生の氏名、授業科目名、コメント
- B：戸田一雄先生、資料組織論
- C：目録の授業
 - ・現在はほとんど使われないカード形式での目録作成を体験できたことは、今となっては貴重でした。
- D：情報検索演習
 - ・PC操作の基本が学べて、社会に出てとても役立ったため。

（3）これまで勤務した図書館名（できれば全部お書きください）

- ・県立・市立・大学など／専任・非常勤・その他／業務内容
- A：十文字中学・高等学校図書館
 - （専任の職員／カウンター業務、発注・登録・装備、督促など）

所沢市中央図書館（アルバイト（約1.5ヶ月）／貸出・返却・配架）

尚美学園短期大学メディアセンター（非常勤職員／業務全般）

尚美学園大学メディアセンター（専任職員／業務全般）

B：十文字学園女子短期大学図書館（専任職員／洋書、白書・年鑑・継続購入図書担当）

比企郡滑川町立図書館（臨時職員／カウンター業務、図書館事務）

東松山市立図書館（任期付職員／寄贈図書担当）

C：東京大学柏図書館（非常勤職員／カウンター業務・図書館事務）

国立教育政策研究所教育図書館（非常勤職員／目録）

青山学院高等部図書館（任期付職員／図書館業務全般）

D：入間市立野田中学校（非常勤職員／利用指導、資料管理を電子化するための入力作業）

武蔵野学院大学図書館（非常勤職員（1年間のみ）・専任職員／図書館運営全般とその統括）

（4）司書課程の教育で良かった点

B：分類法の基本を叩き込んでいただけたこと。

C：基本的な設備の整った蔵書量の多い図書館を演習等で随時利用できる環境にあったのは良かったと思います。

D：単位取得に厳しかった点（時間を守る、提出期限を守る、及第点を取る等）。

（5）司書の仕事の：あなたにとってのやりがい

A：借りた資料について「よかった」と言ってくれる時の学生の笑顔。「大学内で図書館が一番好き」、「図書館を利用したおかげで充実した学生生活送れました」など、学生からの言葉を聞くと、やってよかった、もっとがんばろう、という気持ちになる。

B：言葉にするのは難しいです。でも、とても楽しい仕事です。

C：読書教育が児童生徒の学力の底上げに繋がり、人格形成や人間の教養の育成を促せることが、最大のやりがいだと思います。

D：資料選定、配置の工夫、宣伝等の効果や結果がわかりやすいところ。利用者が「困らない」工夫をし続けられるところ。

（6）社会に出て（図書館司書として）役立った、あるいは必要なスキル

A：本をどれだけ読んでいるか、映画をどれだけみているかなどは、学生に薦める際、必要なもの。昔はなかったインターネットでの情報検索能力、これは大切。時事ニュースの他、最近話題の事（アーティストやトレンド）なども積極的に知っておかないと選書も出来ないし、学生・教員との話にもついていけないし、何を欲しているか知ることが難しい。何を必要としているか聞き出すコミュニケーション能力は重要。

B：必要なスキルはありません。強いて言うなら、数多くの名作をたくさん読むことです。

C：正直、司書課程で学んだ内容が即仕事に役立つことはありません。目録にせよレファレンスにせよ図書館ごとに要求されていることはまったく違うので、実際に働いて覚えていくことばかりです。これはどの仕事にも言えることですが、社会が自分を育ててくれた分、自らも貢献しなければならないと思っています。

D：基本的なPC操作、時事問題・有名図書・ベストセラーの知識。

(7) これから学びたいと思う司書としてのスキル

- A：新しいメディア、電子ブックなど、まだ本学図書館では導入していないメディアにどう対応するか。柔軟な思考力、上層部との折衝力など、司書というより働く者として、自分の立場に必要なスキルを身につけたい。
- B：児童サービス（現在研修中のため）。
- C：図書館業界も情報化の波が押し寄せ、電子媒体での提供も視野に入ってきました。時代に対応できるITスキルはもちろん、情報の正しい取捨選択ができる「目」を持たなければならないと思います。
- D：ILLの知識と経験。

(8) 母校である十文字学園女子大学（2015年度に短大は大学に改組）に希望したいこと。

- A：石川先生のもと、様々な取組みをされているようなので（うらやましい限りです）、これを続けていける体制であり続けていただきたい。
- B：インターンシップのような制度を授業に取り入れて、学生が現場の仕事を体験出来る機会があると何について学んでいるのか、学生たちの実感が得やすいのではないかと思います。
- C：実際に各種図書館へ行き、仕事を見る機会を提供すべきだと思います。見学や演習ではなく、ボランティア（アルバイト）等、実務に関わる経験をカリキュラムに組み込めると、学生にとってより良いのではないのでしょうか。
- D：本気で司書を目指す学生さんに、図書館アルバイトなどの機会があるといいと思います。

(9) 司書課程の後輩たちへのひとこと

- A：いろいろなことに興味を持って、積極的に知るようにしてください。とても知的な仕事ですが、実は体力勝負の仕事でもあります。
- B：図書館によって求められるものが違いますし、学校で学んだ通りではないことも多々あります。講義中、今一つ実感がわかない項目であっても、大切に学んでいってください。きっと、いつか役に立つ時が来ます。
- C：「本が好きだから司書になりたい」という話をよく聞きますが、司書は人と接する仕事です。柔軟なコミュニケーション能力が必要とされますので、大学生のうちに、多種多様な人々と交流する経験を持つておくとうまいと思います。
- D：やりたいと思ったことには、失敗しても遠回りしても挑戦し続けて下さい。

(10) あなたが理想と思う図書館

- A：今は、様々な大学図書館で取り入れている組織化された学生サポーターが、図書館の一員として、積極的に図書館業務に関わっている図書館（我々の補助的業務ではなく、学生目線の企画を展開している図書館）。
- B：読みたい、調べたい資料が備えてある図書館。
- C：図書館は本と人が交流する場です。利用者が血液のように館内を循環することで、生きた図書館となり、その健康とバランスを整えることが司書の仕事だと思っています。たくさんの人々に愛され利用される健やかな図書館が私の理想です。

D：何がどこにあるか分かりやすい、誰にでも利用しやすい図書館。

5.3 アンケートの分析結果

約15-25年前に本学短期大学文学科を卒業され、司書として大学、学校、公共図書館などで勤務している4名の卒業生から、急な調査にもかかわらず丁寧な回答をいただいた。回答者数が4名と僅少ではあるが、いくつかの傾向が表れているようである。

第一に、全ての回答者は、専任・非常勤など雇用形態に変化があり、大学や公共図書館など数か所の図書館を経験していた。司書は女性が比較的に多い職場であるが、結婚やその他の状況により、勤務形態をフレキシブルに変化させていくことも、専門職としての経験域を拡充していよう。

第二に、時代背景として、急速な情報化社会、IT化への変化の時代にあって、さらに現代は電子書籍・電子ジャーナルの導入にみられる図書館資料のデジタル化の渦中に位置していることである。カード目録から書誌データベースへ変化し、同時に事務作業も大きく変化しているため、大学で学習した知識・スキルの有効期限が短縮化する傾向にある。

第三に、大学の司書課程への提案として、学生時代に現場体験、すなわち図書館でのインターンシップやボランティア、アルバイトなどの実務体験を司書課程カリキュラムに導入してはどうか、という意見がみられた。受講人数が多く、調整の難しさもあるが、工夫してカリキュラムの設計を検討できよう。

第四に、卒業生が学びたい研修（スキル）としては、ITスキル、新しいメディアに対応できるスキル、さらには思考力、職場の人間力・児童サービス・ILLなどが多くあげられていた。

第五に、先輩から司書課程の学生（後輩）への「ひとこと」として、コミュニケーション能力の向上を目指すために「多種多様な人々と交流する経験を持つ」、「実感がわかなくても大切に学ぶ」、「やりたいことは失敗しても遠回りしても挑戦し続ける」などが寄せられた。これらの言葉には共通して先輩から後輩に対する想いが込められていた。

第六に、理想の図書館については、「組織化された学生サポーターが活動している」、「読みたい調べたい資料がある」、「たくさんの人と本が交流する、血液循環の良い健やかな図書館」、「わかりやすく利用しやすい図書館」など、専門職としての言葉を垣間見ることができた。

【提言】大学における上級生、卒業生の力を下級生、在学生の支援活動として導入している「メンター制度」が、多くの大学や女子大学で行われている。今回の調査を通じて、刻々と変化する時代背景の中で、卒業生は母校の研修会に参加し、また学生は、先輩司書が登壇する特別授業を受講し、お互いの交流の場を持つことにより、大学で豊かなライブラリアン・コミュニティが形成され、そこから何かが始まる予感がする。本学短期大学部司書課程の教育内容と卒業生の想いが、本学司書課程へ発展的に継承されていくことを期待する。

6. おわりに

本稿では、本学短期大学部司書課程における司書取得者数、カリキュラム（科目名変遷）、担

当者などについて、各種資料に基づき実証的に小史をデザインした。本稿は、一次資料に基づいた歴史的な分析ではなく、二次資料を中心とした網羅的な整理であること、さらには、卒業生の調査報告⁽⁸⁸⁾など本学の過去の調査を十分に踏まえた分析がなされていないため、やや物足りない内容といえよう。しかし、本学短期大学部司書課程の回顧から、省令科目による改定を踏まえつつ本学独自の改定を行うなど、司書課程科目を着実に積み重ねていた歴史や、各科目を担う教員が、公共・大学・専門の各館種、とりわけ埼玉県内の図書館における長年の現場経験を有していたことがわかる。本学では、こうした現場経験に基づく学識を活かした授業が積極的に展開されていたことが推察できる。

近年の本学司書課程の分析については、2012年度に司書課程履修学生の意識調査を実施し、司書課程教育プログラムの方向性を明らかにした⁽⁸⁹⁾。これらの分析を踏まえ、現在の本学司書課程では、①生涯にわたる女性のキャリア形成と、女性が働く図書館現場のリアリティーを早期に発見する取り組み⁽⁹⁰⁾（「図書館基礎特論」科目における卒業生、社会人の登壇）、②授業を通じた「図書館づくり」の経験（「図書館情報資源特論」科目における選書、展示、POPの制作、図書館見学会等）、③入学時の図書館（＝読書）に対する固定的観念を打破し、情報入手のための社会的装置としての図書館の浸透（「図書館情報技術論」科目における日本事務器株式会社との産学連携）、④主体的図書館形成への仕掛け（ライブラリーサポーターの制度）、⑤図書館の現場経験と図書館を取り巻く仕事の発見（インターンシップ先となる図書館・企業の開拓と実践、キハラ株式会社との産学共同）など、授業内外において「図書館現場」の空気を主体的に体感し、現場との接点をつくるプログラムや場の構築を行ってきた。

今後は本学司書課程における教育活動の記録化をはじめ、教育効果の評価と分析をする必要がある。しかし、こうした司書課程の教育活動は、司書課程の枠内で完結することは難しい。学生が所属する各学科の専門的な学びを拓くことを前提としつつ、本学司書課程の教育活動が本学全体の教育プログラムの中にどのように位置づけられるのかを検討し続けなければならない。

本学の伝統のある短期大学部司書課程は改組により幕を閉じることになる。これまでの本学司書課程の歴史を真摯に見つめ、再評価することは、すなわち、本学司書課程における現在の課題が明らかになり、未来へのベクトルを定めることにもつながる。同時に、これまでに本学司書課程の運営や教育に尽力された教職員や、司書資格を取得した卒業生の想いを再発見し、未来へ「記録」し「記憶」することにもつながる。本学司書課程の教育活動の充実と今後のさらなる展開は、本学短期大学部司書課程の歴史とともに刻まれていくことを忘れてはならない。

本稿は、2014年度十文字学園女子大学プロジェクト研究「図書館の理念・ビジョン形成を中心とした参画と協働に関する実証的研究」(研究代表者：石川敬史)の中間報告である。なお本稿の執筆について、5章を東が、それ以外の章を石川が行い、全体調整を石川が担当した。

謝辞

本学卒業生の風間麻里子氏、能見弥生氏、S. K氏、島野香織氏には、アンケート調査に快く応じていただきました。三澤勝己先生（本学司書課程非常勤講師）には、担当教員名の調査

につきましてご支援をいただきました。さらに、本稿の執筆にあたり、資料の収集と閲覧について、以下の本学職員の皆様（50音順）より多大なるご支援とご配慮をいただきました。改めて深く感謝申し上げます。

安達美奈子氏、荒川仁志氏、泉佳代子氏、稲垣友子氏、笠木貴和子氏、近藤秀二氏、金真由氏、清水真佐子氏、乗田真理子氏

表5 短期大学部司書課程科目担当教員一覧

- ・空欄は当該年度に「開講なし」の状態を示す。
- ・「-」は科目を設置していない状態を示す。
- ・本学の学生支援部教務課所蔵の『学生便覧』各年度を参照して作成した。

	科目名	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	
甲群	図書館通論	松本収正 上野	林收正 上野	林收正	林收正	林收正	林收正	林收正	
	図書館資料論	藤田忠雄 松本収正	藤田忠雄 林收正	林收正	林收正	吉澤輝夫	吉澤輝夫	木原美恵子	
	参考業務	松本収正	林收正	林收正	林收正	中佐古勇	末吉哲郎	末吉哲郎	
	図書館活動	松本収正	林收正	上野茂	上野茂	中佐古勇	林收正	林收正	
	資料組織論	-		林收正	林收正	林收正	林收正		
	資料目録法	松本収正	林收正	-					
	資料分類法	津久井安夫	津久井安夫	-					
	参考業務演習	松本収正	林收正	林收正	林收正	林收正	末吉哲郎	末吉哲郎	
	資料組織演習	-		林收正	林收正	林收正	林收正		
	資料目録法演習	松本収正	林收正	-					
資料分類法演習	津久井安夫	林收正	-						
図書館実習		林收正	林收正	林收正	-				
乙群	図書及び図書館史	松本収正	林收正	-					
	資料整理法特論	長谷川宏	長谷川宏 林收正	長谷川宏	長谷川宏	林收正	木原美恵子	木原美恵子	
	情報管理	前川	前川	-					
	青少年の読書と資料		林收正	林收正	林收正	林收正	林收正	林收正	
	図書館の施設と設備	-	林收正	-					
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	石沢激	石沢激	石沢激	石沢激	石沢激	石沢激	石沢激	
	社会教育	中藤喜八郎	中藤喜八郎	中藤喜八郎	中藤喜八郎	中藤喜八郎	藤井均	藤井均	
	視聴覚教育	野間	中村次郎	中村次郎	中村次郎	中村次郎	藤井均	藤井均	

	科目名	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986
甲群	図書館通論		草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名
	図書館資料論	木原美恵子	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名
	参考業務	末吉哲郎	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名
	図書館活動	林收正	林收正	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名
	資料組織論	林收正	林收正	林收正	林收正	林收正	関根敬一郎	関根敬一郎
	参考業務演習	末吉哲郎	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名
	資料組織演習	林收正	林收正	林收正	林收正	林收正	関根敬一郎	関根敬一郎
乙群	資料整理法特論	木原美恵子	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名
	青少年の読書と資料	林收正	林收正	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名
丙群	人文科学及び社会科学の書誌解題	石沢激	石沢激	石沢激	石沢激	石沢激	石沢激	-
	社会教育	藤井均	藤井均	藤井均	藤井均	青山孝行	中藤喜八郎	中藤喜八郎
	視聴覚教育	藤井均	藤井均	佐藤元	佐藤元	佐藤元	佐藤元	佐藤元
	コミュニケーション論			-			狩野敏也	狩野敏也

	科目名	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993
甲群	図書館通論	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇
	図書館資料論	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	志村尚夫	志村尚夫	志村尚夫
	参考業務	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄
	図書館活動	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄
	資料組織論	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄
	参考業務演習	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄
	資料組織演習	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	志村尚夫	志村尚夫	志村尚夫 狩野敏也
乙群	資料整理法特論	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇
	青少年の読書と資料	草野正名	草野正名	草野正名	草野正名	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇
丙群	社会教育	中藤喜八郎	中藤喜八郎			-		
	視聴覚教育 〔「情報処理」の読み替え：1990-1998〕	佐藤元	佐藤元	佐藤元	谷直樹 波多野和彦	綿井雅康 森田信一 谷直樹	上山英昭 橋本弓子 大滝真知子 綿井雅康	上山英昭 橋本弓子 大滝真知子 綿井雅康
	コミュニケーション論	狩野敏也	佐田一彦	佐田一彦 狩野敏也	-			
	マスコミュニケーション 〔「コミュニケーション論」の読み替え：1990-1998〕	-			阿部喜充 狩野敏也	阿部喜充 狩野敏也	丸田実 狩野敏也	丸田実 狩野敏也

- * 「情報処理」は学科専門科目、「コミュニケーション論」は共通・基礎科目に該当するため、学科により担当者が異なる場合がある。
 * 「情報処理」を詳細にみると、「情報処理A」、「情報処理B」、「情報処理C」、「情報処理D」が存在したが、上記表では全て「情報処理」として担当者名を記載した。

	科目名	1994	1995	1996	1997	1998
甲群	図書館通論	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇
	図書館資料論	志村尚夫	志村尚夫	志村尚夫	志村尚夫	志村尚夫
	参考業務	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄
	図書館活動	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄
	資料組織論	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄	戸田一雄
	参考業務演習	中佐古勇 戸田一雄	中佐古勇 戸田一雄	中佐古勇 戸田一雄	中佐古勇 戸田一雄	中佐古勇 戸田一雄
	資料組織演習	志村尚夫 狩野敏也	志村尚夫 狩野敏也	志村尚夫 狩野敏也	志村尚夫 狩野敏也 石田嘉和	狩野敏也 戸田一雄
乙群	資料整理法特論	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇
	青少年の読書と資料	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇	中佐古勇
丙群	視聴覚教育 〔「情報処理」の読み替え：1990-1998〕	上山英昭 大滝真知子 綿井雅康	上山英昭 大滝真知子 綿井雅康	上山英昭 大滝真知子 綿井雅康 田中熙巳	上山英昭 浅野孝夫 橋本克己 加藤暁子 大滝真知子 綿井雅康 田中熙巳	浅野孝夫 橋本克己 加藤暁子 大滝真知子 綿井雅康 田中熙巳
	マスコミュニケーション 〔「コミュニケーション論」の読み替え：1990-1998〕	丸田実 狩野敏也	丸田実 狩野敏也	丸田実 狩野敏也	丸田実 狩野敏也	丸田実 狩野敏也

	科目名	2012	2013	2014	2015
甲群	生涯学習概論	橋本克己	井口啓太郎	青木玲子	星野敦子
	図書館概論	石川敬史	石川敬史	石川敬史	石川敬史
	図書館制度・経営論	西来路秀彦	西来路秀彦	西来路秀彦	内野安彦
	図書館情報技術論	石川敬史	石川敬史	石川敬史	石川敬史 近藤秀二
	図書館サービス概論	石川敬史	石川敬史	石川敬史	石川敬史
	情報サービス論	三澤勝己	三澤勝己	三澤勝己	三澤勝己
	児童サービス論	紺野順子	紺野順子	紺野順子	杉山きく子
	情報サービス演習Ⅰ	紺野順子	紺野順子	紺野順子	石川敬史 三澤勝己
	情報サービス演習Ⅱ	石川敬史	石川敬史	石川敬史	石川敬史
	図書館情報資源概論	石川敬史	石川敬史	石川敬史	石川敬史
	情報資源組織論	三澤勝己	三澤勝己	三澤勝己	三澤勝己
	情報資源組織演習	富田美樹子	富田美樹子	富田美樹子	富田美樹子
乙群	図書館基礎特論	石川敬史 紺野順子	石川敬史 紺野順子	石川敬史 紺野順子	石川敬史
	図書館サービス特論	石川敬史 近藤秀二	石川敬史 近藤秀二	中沢孝之 近藤秀二	中沢孝之
	図書館情報資源特論	石川敬史	石川敬史	石川敬史	石川敬史
	図書・図書館史	富田美樹子	富田美樹子	石川敬史	—

*2015年度の担当者名は予定。

注・参考文献

- (1) 文部科学省「司書養成科目開講大学一覧」(平成25年4月1日現在)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/04040502.htm
- (2) 大学・短大名は次の通りである(50音順)。
 秋草学園短期大学、跡見学園女子大学、埼玉学園大学、十文字学園女子大学、十文字学園女子大学短期大学部、駿河台大学、聖学院大学、独協大学、文教大学
- (3) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学会用語辞典』第4版、丸善、284p.
- (4) 「9. 図書館学開講大学」『図書館年鑑2014』日本図書館協会、2014.8, p.755-763.
- (5) 女子聖学院短期大学『女子聖学院短期大学:司書課程15年史』女子聖学院短期大学、1990.1, 109p.
- (6) 女子聖学院短期大学司書課程20周年記念実行委員会記念誌編集委員会『女子聖学院短期大学:司書課程20周年記念誌』女子聖学院短期大学、1995.8, 91p.
- (7) 司書課程30周年記念会『聖学院の司書養成:司書課程開設30周年記念』聖学院大学、2004.8, 114p.
- (8) 「同志社大学図書館司書課程60周年記念特集号」『同志社大学図書館学年報』38, 2013.3, 237p.
- (9) 鶴見大学司書・司書補講習60周年記念事業実行委員会『学校法人総持学園創立90周年記念:鶴見大学司書・司書補講習60周年記念誌』鶴見大学、2014.9, 74p.
- (10) 川崎良孝、福永智子『椋山短大の図書館員養成教育:司書課程25年の歴史・現状・課題』椋山女学園大学短期大学部司書課程、1995.4, 146p.

- (11) 2002年に江藤茂博先生らによる記録が残されている。(「小特集・図書館学」『十文字国文』8, 2002.3, p.92-116.)
- (12) 本学の学生支援部教務課に保存されている『図書館司書単位取得証明書：昭和五十年三月記』（十文字学園女子短期大学）からデータを抽出した。なお、表の作成や分析にあたり、前掲(8)の『同志社大学図書館学年報』を参考にした。
- (13) したがって、2014、2015年度の数字は「司書資格取得見込者数」となり、実際の司書資格取得者数とは異なる。
- (14) 1989年度に募集停止（1989年度教養学科開設）。
- (15) 各年度の『学生便覧』における「学科選考別免許状・資格等の取得一覧」を参考にした。
- (16) 柴田正美「省令科目をふりかえる：戦後における司書・司書教諭養成体制を整理する」『図書館文化史研究』27, 2010, p.5-30.
- (17) 阪田蓉子「司書養成と司書課程」『図書館文化史研究』19, 2002, p.111-131.
- (18) 川原亜希世「近畿大学司書課程の現状」『近畿大学短大論集』38(1), 2005.12, p.55-64.
- (19) 平井歩実「図書館法改正：その意味と問題点—司書課程リニューアルにおける新戦略」『明星大学研究紀要—人文学部』45, 2009.3, p.53-78.
- (20) 平野英俊「新しい図書館司書課程への移行対応と司書養成教育をめぐる問題」『現代の図書館』49(4), 2011, p.227-231.
- (21) 二村健「明星大学の新しい司書課程」『現代の図書館』49(3), 2011, p.192-195.
- (22) 田窪直規「近畿大学の司書課程運営について：戦略、コンセプト、関連資格」『現代の図書館』50(2), 2012, p.133-138.
- (23) 柴田正美「1.9.2カリキュラムと資格」『図書館情報学ハンドブック』第2版, 丸善, 1999, p.135-138. 1997年までの時代区分を参考にした。
- (24) 各年度の司書課程科目は、本学学生支援部教務課に所蔵されている『学生便覧』の各年度を参考にした。整理方法は、前掲(8)の同志社大学による方法を参考にした。
- (25) 十文字学園女子短期大学『73学生便覧』1973, p.52参照。
- (26) 十文字学園女子短期大学『90-91学生便覧』1990, p.28参照。ここには「本年度「視聴覚教育」は「情報処理」を、「マスコミュニケーション」は「コミュニケーション論」をもって代える。」とある。
- (27) 前掲(26)
- (28) 「図書館法施行規則の一部を改正する省令の制定並びに司書及び司書補の講習において履修すべき科目の単位の修得に相当する勤務経験及び資格等を定める告示の公示等について」（1996.9.6, 文生学第180号, 文部省生涯学習局長通知）
- (29) 十文字学園女子短期大学『平成11年度学生便覧』p.126参照。
- (30) 十文字学園女子短期大学『平成14年度学生便覧』p.125.
- (31) 「林收正」『researchmap』<http://researchmap.jp/read0039292/>（2014.12.14確認）
- (32) 1969-1970年にかけての著作物の所属は「間宮図書館研究所代表」となっている。（松本収正「能率的な本の集め方：その三 件名目録をつくる（ホームライブラリー・テクニックスシリーズ）」『新刊展望』13(9), 1969.9, p.27-29.)

- (33) 1971年には茨城女子短期大学の紀要に執筆していることから、大学に在職していたことがうかがえる。(松本収正「大学図書館における運営組織」『茨城女子短期大学紀要』1, 1971, p.14-19.)
- (34) 林收正「カリキュラム」前掲(5), p.60参照。
- (35) 林收正「女子聖学院短期大学司書課程の教育方針について」前掲(5), p.6参照。
- (36) 藤田忠雄「図書選定30年：舞台裏からの回想とメモ」『図書館雑誌』73(11), 1979.11, p.610-911.
- (37) 藤田忠雄「社会科学・自然科学のシリーズ」『学校図書館』155, 1963.9, p.19-22. なおここでは、所属が「日本図書館協会選定部」と記されている。
- (38) 藤田忠雄「NDC関係文献目録：続・戦後NDC関係文献目録」『図書館雑誌』73(8), 1979.8, p.405-407.
- (39) 上野茂「人間をつくる仕事」『思い出の図書館』1978.10, p.310-314. このほか奥付の「編著者略歴」も参考にした。
- (40) 上野茂「埼玉県立図書館運営の覚書」『図書館雑誌』57(9), 1963.9, p.404-407.
- (41) 津久井安夫「回想」『私立大学図書館協会会報』50, 1968.5, p.7-10.
- (42) 「執筆者一覧 (ABC順)」『図書館学とその周辺：天野敬太郎先生古希記念論文集』天野敬太郎先生古希記念会編, 巖南堂書店, 1971.7, p.1129-1131.
- (43) 長谷川宏「標準読みものについての一つの試み」『読書科学』2(4), 1958.3, p.25-33.
- (44) Hase「埼玉県行田女子高等学校図書館昭和26年度目標」『月報』1(1), 1951.6, p.1-2.
- (45) H「行田女子高等学校図書館書架目録について」『月報』1952.2, p.80.
- (46) H「本校図書館ではどのように購入図書を決めているか」『月報』3(1), 1953.5, p.22.
- (47) 埼玉県立行田女子高等学校創立六十周年記念誌編集委員会『歩み60年』埼玉県立行田女子高等学校, 1975, 92p.
- (48) 埼玉県立行田女子高等学校『図書館概要：昭和32年度』1957, 15p.
- (49) 1967年当時、埼玉県立浦和図書館の勤務年数が「6.8」とあるため、1960年頃に勤務したとみられる。(埼玉県公共図書館連絡協議会『公立図書館の概要：昭和42年度』1967.6, p.18参照。
- (50) 森田雄一、長谷川宏『埼玉資料解説目録稿』長谷川宏, 1972.12, 327p. 奥付の所属に「埼玉県立熊谷図書館館内奉仕課長」とある。
- (51) 下記の文献を参考にした。なお、「1977年(3年目)に長谷川宏先生が埼玉県立熊谷図書館副館長を退職された…(略)…」との記載もある。(林收正「女子聖学院短期大学における司書課程の教育課程」前掲(6) 1995.8, p.21-23.)
- ・長谷川宏ほか「<対談>長谷川宏先生と図書館」『Librarian's Club』1, 1991, p.8-26.
 - ・埼玉県公共図書館協議会『埼玉の公立図書館』各年度を参照。
- (52) 長谷川宏、中佐古勇『資料整理法特論』教育出版センター, 1977.5. 奥付の略歴参照。
- (53) 埼玉県立公文書館編『文書館紀要』6, 1992. 奥付の所属参照。
- (54) 前掲(6), 奥付参照。
- (55) 「中藤喜八郎氏の略歴」『人を創る・中藤喜八郎の人と教育』藤の会編集部, 大宮市教育振

- 興出版部，1985.9, p.184-187参照。
- (56) 主に下記の文献を参考にした。
- ・小野泰博「草野正名先生の業績について」『図書館短期大学紀要』17,1979, p.3-7.
 - ・草野正名『図書館学原論』増補改訂，内田老鶴圃，1967. 奥付参照。
- (57) 「図書館学で初の博士号」『埼玉新聞』1960.9.13.
- (58) 末吉哲郎「末吉哲郎略年譜」『文献探索2011』2011, p.53.
- (59) Whoplus（日外アソシエーツ）によると、「1956年経済団体連合会事務局に入り」と記載されている。
- (60) 末吉哲郎「専門図書館員の個性的活動」『図書館雑誌』60(6)，1966.7, p.218-220.
- (61) Whoplus（日外アソシエーツ）を参照、引用した。
- (62) 紀田順一郎、井上如、勝又浩、末吉哲郎編『現代日本執筆者大辞典77/82』日外アソシエーツ，1984.3.
- (63) 末吉哲郎編著『末吉哲郎著作選集：専門図書館とネットワーク：傘寿記念』金沢文圃閣，2013(文献探索人叢書，16)
- (64) 藤井均『続続・ゆずり葉のこころ』全国教育新聞社，1999.11. 奥付の略歴参照。
- (65) 木原美恵子「流通経済情報：社会経済情報入門講座⑥」『ドクメンテーション研究』25(12)，1976.12, p.531-538.
- (66) 「財団法人流通経済研究所40年史」編集委員会『財団法人流通経済研究所40年史：流通の進化をめざして』2007.3, 211p.
- (67) 以下の内容については、Whoplus（日外アソシエーツ）を参照、引用。
- (68) 中佐古勇『こうすれば秘書検定試験に合格できる』中央経済社，1991.3. 奥付の略歴参照。
- (69) 中佐古勇『学校図書館の管理と運用（文部省認可通信教育）』近畿大学，[1970]. 冒頭の「はじめに」に「昭和四十五年八月記」とある。
- (70) 長谷川宏、中佐古勇『資料整理法特論』教育出版センター，1977.5. 奥付の略歴参照。
- (71) 中佐古勇『ビジネスタイムのマナー塾』日本経営出版会，1987.2. 奥付の略歴参照。
- (72) 中佐古勇、吉田寛治『現代の人間関係』改訂・増補版，1983.4. 奥付の略歴参照。
- (73) 『埼玉の公立図書館』（埼玉県公共図書館協議会）によると、1980年度から館長に戸田先生の記載がある。なお、新座市立図書館の新館落成式は1979年6月であった。
- (74) 戸田一雄「子どもの読書を観る：読書調査を通して」『教育学論叢（国土館大学教育学会）』5，1987, p.154-131.
- (75) Whoplus（日外アソシエーツ）を参照、引用。
- (76) 狩野敏也『美食・怪食うんちく事典』里文出版，2012.10. 略歴参照。
- (77) 狩野敏也、斉藤俊彦『生活の整理とくふう』国土社，1977.3. 奥付の略歴参照。
- (78) 1967年当時、埼玉県立浦和図書館の勤務年数が「10.2」とあるため、1957年頃に勤務したとみられる。（埼玉県公共図書館連絡協議会『公立図書館の概要：昭和42年度』1967.6, p.18参照。）
- (79) 関根敬一郎「整理技術論への視点：中小公共図書館を念頭に」『図書館雑誌』59(11)，1965.1, p.6-9.

- (80) 埼玉県公共図書館協議会『埼玉の公立図書館』各年度を参照。
- (81) 埼玉県立文書館『要覧』の各年度を参照。
- (82) 関根敬一郎「文書館づくりの一瞥」『全国歴史資料保存利用機関連絡協議会会報』22, 1991.9, p.1.
- (83) 関根敬一郎『間歇泉』下須奈艸舎, 1999.8、296p.
- (84) 加藤信哉「恩師 志村尚夫先生を偲んで」『日本図書館情報学会誌』59(1), 2013.3, p.59.
- (85) 石沢澈「現代日本の経済構造と法則」『北海道教育大学紀要第一部B.社会科学編』22(2), 1972.1, p.72-86.
- (86) 前掲(5)の「執筆者一覧」には、「日本出版販売株式会社広報課主任」とある。
- (87) 前掲(6), p.86-89。「科目担当教員一覧」を参照。
- (88) 十文字学園女子短期大学『短大卒業生のキャリアと生活：十文字女子短期大学卒業生調査報告書』十文字学園女子短期大学, 1993.6, 123p.
- (89) 石川敬史ほか「司書資格取得希望学生の意識調査と司書課程教育プログラムの方向性」『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』10, 2012, p.137-149.
- (90) 2013、2014年度の本学プロジェクト研究の一部の成果として、下記も発表している。
- ・石川敬史ほか「女性図書館・情報担当者のキャリア形成に関する予備的考察」『日本教育情報学会年会論文集』29, 2013.11, p.300-301.
 - ・石川敬史ほか「女性図書館員・情報担当者のライフコースとキャリア形成」『日本教育情報学会年会論文集』30, 2014.8, p.56-57.